現代的意義のある伝奇

萩野　脩二

葉広芩著
福地桂子・奥脇みち子・田蔵訳
青木川伝奇

A5判　412頁
中国書店
［本体 4,000円 + 税］

葉広芩の『青木川伝奇』は、実にユニークな視点から、陝西の僻地を拠点とした匪賊の話を描き、共産党の偉いさんよりも、その匪賊に土地の人びとが懐旧の念を持つという、血沸き肉躍る面白い小説である。

この小説は、葉広芩が二〇〇六年一〇月二五日に日本の名古屋で書き上げた長編である。そして、私が読んだのは、二〇〇七年一二月太白文芸出版社から発行された『青木川』の翻訳である。

葉広芩と日本との関係は長く深い。それ故、この小説にも、日本に留学した鍾一山という男が出てくる。この男は、楊貴妃に関心を持っていて、楊貴妃が日本の山口県長門市油谷町に流れ着いたという伝承に興味を持ち、その地にまで出かけている。物語は、鍾一山と同級生の馮小羽、小羽の父親である馮明の三人で青木川にやって来るところから始まる。目的は、楊貴妃の何らかの遺跡をここ青木川で見つけることである。

青木川とは、陝西省寧強県に属する鎮の名前である。ここは、小さい僻地ではあるが、北は甘粛、南は四川、そして東は西安に通じる交通の要所であった。鍾一山は異常な執着を以て森林に分け入り、古の古道・儻駱古道で大唐故唐安皇女という落款のある寺の遺跡を見つけるのだが、それは地元政府から、観光資源となると喜ばれ、鎮の発展に寄与するとされる。

馮小羽は、張保国が鍾一山の青木川に来る動機を勘違いしているようだと感じたので、すぐに言った。「この帰国者は投資家ではなく歴史研究家です」／すると張保国はさらに熱心に言った。「歴史研究家も歓迎しますよ。文

化はすべての経済発展の礎です。社会主義の新しい農村を建設するのに一番大事なのが文化ですから」（二二頁）

まさに日本の村おこしと同じ発想がここにあるし、ここに、葉広芩が描く小説の現代的意義がある。

そもそも、この青木川訪問は、馮明の希望によるものであった。馮明はここで土地革命を戦い、ここ一帯を勢力範囲とする匪賊・魏富堂（実在の人物は人民自衛団司令の魏輔唐）と戦った解放軍第三大隊政治教導員であった。彼は五〇年ぶりに青木川を再訪し、人生の終末を迎えようとしていたのである。

ところが、馮明が心の故郷と思っている青木川に来てみると、当時一緒に戦った古老たちはほとんどこの世におらず、その息子の世代となっており、彼らももう六〇歳ほどの老人で、土地革命のこともあまり覚えていない。

馮明が男に名前を聞くと、「許です」と答えた。馮明が「誰の息子さんかね」と聞くと、男は警戒して「俺が誰の息子だろうが、お前さんには関係ないだろう」と言った。（略）男も少し言い過ぎたと思ったのだろう、しばらくしておだやかな口調で馮明に「あなたはどなたですか」と聞いた。／「馮明です」／「馮明って誰ですか」／「馮明とは私のことです」（略）馮明は名前を言ったあと、感嘆の声が上がるのをいささか期待して待った。青木川に名声轟く馮明政治教導員を知らない人がいるはずがない！／男はしばらく思い出そうとしていたが、結局「知りません」と頭を横に振った。（一八頁）

若い世代の者は馮明など知らない。それどころか、生き残っている古老たちも当時極悪非道の匪賊として大衆裁判にかけて銃殺刑にした魏富堂を懐かしむのであった。

魏富堂は、わがままで独裁者であったが、この地に教育を充実させ、経済的発展を図り、徳政を敷いていたのだ。その証拠が学校であった。こんな辺鄙なところにバロック風のレリーフのある洋館の建物を建て、英語のできるキリスト教徒の女校長を迎え、子弟にみな流暢な英語をしゃべらせた。優秀な子弟がいれば西安などの大都市への留学資金も出し、家族への援助もしていた。

土地の人たちの心に残っているのは、魏富堂の実践行動であり、一九五二年の土地革命以後五〇年余りもこの土地を離れていた馮明の印象ではなかった。せいぜい彼らにあるのは、共産党の偉いさんが今なおどれだけの益を図ってくれるかどうかだけなのであった。

確かに土地革命のときには、家や田畑を分け与えてくれた。でも、今はまた、例えばその家も観光資源として明け渡せと地元政府は言う。匪賊・魏富堂の遺跡は新たな観光資源となるのであった。辺鄙な土地は、過去の遺跡を観光資源とするほか、これと言って産業がないわけだから。他のところには、『芙蓉鎮』や『収租院』の成功があるではないか。

しかし、土地の人びともそれなりに辛い時代を過ごしてもいた。

魏元林のこの説明で、馮明は思い出した。この家の外で、馮明たちは匪賊の「田ウナギ」と戦った。「では、あの英雄の老万は?」と馮明が魏元林に聞いた。／魏元林が「一九六七年に死にました」と答えたので、「何の病気で?」と聞くと、「自殺です」と言う。「なぜ自殺を?」と尋ねると、「内部審査と外部調査で、彼が国民党の残党だということになり、さらに青木川に潜んでいた匪賊のスパイだということになって」と言った。／馮明が「まったくのでたらめだ!」と言った。／魏元林が言った。「その通り、ひどい話です。当時は誰もがでたらめで、まともな人間はほとんどいなかった。老万は『残党』と言われ、わしも『虫けら』と言われた。『残党』は一日牢屋に入れられただけで自殺し、自ら人民と絶縁したんです。（略）（二二六頁）

彼らの多くは文化大革命の時には、国民党のスパイだとか、匪賊の残党としてつるし上げの対象となっていたのだった。

馮明は言った。「人民のために働いた人を、人民は忘れない。青木川の功績帳には、趙大慶さんの功績が特筆されています」／言い終わって、馮明は今の言葉の虚しさに気付いた。近年、時々建前だけの立派な言葉を吐くのが癖になっていた。趙大慶の現実を目の前にして、どんな言葉を贈っても、実際に問題が解決しなければ意味がないと感じた。／青い顔をした趙大慶は、着ている服がブランド品なので、足を伸ばして座り、日向ぼっこをしている様子は滑稽に見えた。Tシャツは正真正銘のフランスのクロコダイルだが、胸の辺りに紅茶の染みがついている。それがブランドのTシャツが山奥へ「下放」させられた本当の理由だろう。靴も普通のではない、アメリカ製のナイキのハイカット・スニーカーだ。八〇歳の趙大慶が履いていると、片方だけでも趙大慶の品位がぐんと上がり、ファッションリーダーか、上流の紳士、帰

国華僑でなければ億万長者か大物と見られるだろう。だが、苦しみを嘗め尽くした顔には風雪が刻み込まれている。つまり、生産委員趙大慶の一生は、順調で裕福な暮らしではなく、祝福すべき輝かしい人生ではなかった。

（三四四頁）

何度も政治キャンペーンを繰り返してきた人々の暮らしは向上したのか、少しでも良くなったのか。相変わらずの貧困の中で暮らす人々を見て、馮明ならずとも思うではないか。自分たちが命を賭して戦った革命、すなわち中国の土地革命とは何であったのか。その後の文化大革命は何を人民にもたらしたのか。ここに描かれている土地改革の時、主力として働いた魏元林や趙大慶などの描写は、期せずして中国人民が数々の革命を経て来た実感を吐露したものとなっている。人民とはどういうものであるのか。今や単純に共産党の指導に唯々諾々と従うばかりではないことを葉広芩の筆は見事に語っているではないか。

小説は、馮小羽が消えてしまった学校の校長の、正体を暴き出す話を織り交ぜている。そこには幻想的で奇妙な姉妹の話も語られている。確かに青木川を舞台とする伝奇が描かれてはいる。但し、原作は「青木川」唯一つなのである。私はここに作者・葉広芩と日本の私を含めた読者との隔たりを感じた。作者・葉広芩は中国人としてやはり現在の中国への問題意識が離れないのであろう。観光資源によって村おこしをするしかない地方の辺鄙な土地も、都市と地方の格差の実態も、どっぷりとつかった中国の現在なのである。だから、葉広芩の筆はそこかしこに辛辣な地方政府という伝統に胡坐をかく上層部の実態を逃さない。中国の問題意識を鋭くえぐったこの小説は、葉広芩の現在の中国認識・実態であり、伝奇物語ではない。

私たち日本人には、青木川を舞台とする新奇な幻想的な物語であるが、この距離は多分動かしがたいであろう。

小説には、言うまでもなく、いくらでも新奇な話がちりばめられている。例えば、魏富堂が襲った教会の話には、彼が得ようとしてついに得られなかったものが描かれている。いわゆる田舎の匪賊が西欧の文化に接した時の得も言われぬ驚きが描かれている。

見たのは、テーブルクロス、ナイフとフォーク、オルガン、電話などだった。つまりこのときの襲撃で、彼は現代文明に出合い、文明の具体的な姿が醸し出す魅力を知ったのではないか。それが匪賊魏富堂に自己を問い直させ、

もっといえば自分の生き方に疑問を生じさせたのではないか。馮小羽はのちにそう総括した。（八二頁）

但し、文化とはそう単純なものではなく、定着するには相当の時間が必要なことも、葉広芩は忘れていないから、匪賊・魏富堂の付け焼刃の文明の模倣は次々と失敗する。それも面白い。

訳文は三人の推敲によって良くこなれていて、訳注も簡にして要を得ている。「主要登場人物表」などを作って、この長編をより読みやすくしている。特に文革時に使われた慣用句の説明などは有益である。

最後に気づいた誤植及び衍字をほんの少し挙げておこう。

二三五頁下九行目、『趙姓三源遷徙碑』→『趙姓三源遷徙碑』。
二三七頁下八行目、取らないないだろう→取らないだろう。
二九六頁下一行目、「黄鱔尾」→「田ウナギ」。
三〇八頁上九行目、安らかなな顔→安らかな顔。
三二四頁下四行目、劉小猪猪は→劉小猪は。
四〇三頁上四行目、解放軍一七一連帯第三大隊→解放軍一七一連隊第三大隊。

（はぎの・しゅうじ　関西大学名誉教授）

中国年鑑2017

◎ 5月26日刊行 ◎

中国研究所　編・発行

明石書店　発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判　522頁

価格：18,000円＋税

◆特集＝党大会と巨竜の行方

習近平政権は、国内外にさまざまな問題をかかえながら、ますます存在感を増している。今秋5年ぶりに開かれる共産党第19回大会を経て、中国はどこへ向かうのか？　今日の中国に関する多方面にわたる情報を提供します。

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2016年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は中国研究所事務局まで

一般社団法人　中国研究所

〒112－0012
東京都文京区大塚6-22-18
TEL：03-3947-8029
FAX：03-3947-8039
e-mail:c-chuken@tcn-catv.ne.jp
URL:http://www.chuken1946.or.jp